

2021年4月9日

ミャンマーの軍事クーデターを非難し、 民主主義の破壊を憂慮する

立命館大学国際平和ミュージアム 館長 吾郷 眞一
名誉館長 安斎 育郎

世界の多くの国や地域で民主主義に対して様々な挑戦が行われていますが、2021年2月に発生したミャンマーにおける軍事クーデターは、民主主義のみならず人権、人道への挑戦です。長い軍政が終焉して、民主的な統治が動き始めたばかりのミャンマーで起こっている非人道的な事態に対して、世界各地からも非難の声が上がっています。国連では事務総長や安全保障理事会が声明を出すとともに、ミャンマー軍による市民に対するきわめて悪質な暴力行為（7歳の少女も犠牲に）は、人道に対する罪が国際刑事裁判所で問われうることも報道されています。世界中の多くのNGOも抗議声明を出し、一部にはミャンマーで活動する多国籍企業さえも抗議行動に参加し、世界銀行とアジア開発銀行はミャンマーに対する融資を一時停止しました。

平和を希求し、歴史的教訓の上に平和創造への判断枠組みを提供する当国際平和ミュージアムとしても座視することができない状況です。本学を含め多くのミャンマーからの留学生を抱える大学も直接的な被害を受けています。新型コロナウイルス感染症の蔓延で移動の自由が束縛されている中、学びを継承するオンラインもサイバー規制によって阻害され、兄弟や親戚が軍によって殺された人たちもいます。今のところ通じているFacebookを利用して、学生や卒業生から刻々と入ってくる被害状況の報告や画像には大きな驚きとともに、強い憤りを禁じえません。

居たたまれない気持ちをもつ学生諸君に寄り添い、蛮行を繰り返すミャンマー軍に対して、立命館大学国際平和ミュージアムとして強い怒りの声明を発するとともに、直ちに反人権的な行為を停止するよう求めます。日本政府も、国際社会と連携して平和的な解決に向けて適切な措置を遅滞なくとるよう要求します。